

## きれいすぎる夕焼け―小島なおの視野と想像力

斉藤 倫子

この世界にいつのまにか携帯電話が出来て、予想外の速さでスマートフォンへと進化し、それはほとんど生活の必需品となった。ひとりひとりが所有する携帯電話によって、より自由に人と関わる事が可能になり、SNSのライブ機能で帰宅後から就寝前までの自分を配信し、長時間ずっと人と繋がっている高校生もいると聞く。SNSによって、実際に会っているのと近い感覚で気軽に人と繋がれる事はそれはそれで楽しい。だが、四六時中そうして誰かと繋がりが、一見賑やかで華やかな日々を送ることは、本当に孤独ではなく、人間の心を充実させてくれるのだろうか。

こういった思いの先に思い浮かぶ歌集がある。小島なおの『乱反射』と『サリンジャーは死んでしまった』の二冊だ。小島なおは、学生の頃から携帯電話を使用し、スマートフォンへの進化に馴染み、使い込んでいる世代の一人だ。『乱反射』に次の一首がある。

ひとりみただ夕焼けきれいすぎたから今日は  
メールを見ないで眠る

きれいな夕焼けに出会い、じつくりと味わって見たその感動はとても尊く、もうしばらく大切にしていたい、心の中にまだある夕焼けの美しさを他のもので消さないまま眠りたいという歌意だろう。人から来たメールを見るのも返信してやり取りするのも楽しいけれども、誰かと繋がってしまったらもったいないのだ。感動を心に宿すひとりの時間の豊かさを彼女は知っている。それゆえ一瞬でも心の中に訪れるそれを彼女は逃さない。次の四首に注目してみる。

遮断機が下りてふたたび開くまで球根のご  
とくひとりのわたし 『乱反射』  
街路樹の濡れて明るい冬の夜こんなに楽し  
くこんなにひとり

『サリンジャーは死んでしまった』  
横断歩道わたればふいに縦しまの孤独おし  
よせ靴が脱げたり  
てのひらに生えし茸をあきかぜにかざしひ  
とりの時間を愛す

一首目、前方を遮断され、音に全身を包まれる感覚の中、体の内部にある心は、進める時が来るのをじっと待っている。それは、球根の中で春の発芽の時を待つ芽の雰囲気と重なる。近くの誰をも見ずに、自分に意識を向けていた、実感による表現だ。

二首目、美しい風景に出会うと、表現者には時に楽しさと孤独感と一緒に訪れる。それは、ひとりで味わう感動の格別な深さを知っているからだ。人間らしく生きていくゆえの生々しい複雑な感情である。

三首目、ほんの短い時間の孤独。横縞の白線を踏みながら縦に真っ直ぐ進むだけの場所で、ひとりひとりがひたすら急いでいる。この孤独感に閉塞感に近いものだろうか。このひとりの時間は濃密だ。ぐっとおしよせて靴が脱げるほどの。

四首目、静かですこし切ない歌。「てのひらに生えし茸」は、途方もなく長い寂しさの象徴と私はとらえた。だが茸は芳醇な香りを漂わせ、美味であり、愛らしい姿かたちをしている。それが彼女の一部分になって秋風にそよいでいる様子は想像すると美しい。

小島なおが感じるひとりの時間は、豊かで濃密で、切なく美しく、感動や楽しさにも通じているけれども、やはり息苦しさや孤独感が押しよせる時間でもあるのだ。それは、自分を柔軟に見つめて知っていく過程でもある。そして短歌として作品化することによって、彼女は人間性を深めていく。

また、自分を凝視する一方で、彼女の場合は、他者にも深いまなざしを向ける。寂しさから目をそらさないため、他者

の寂しさにも敏感であり、植物や物にも命や心があると尊重して精神を傾ける。次の四首を読み込んでみたい。

豆乳を飲みつつ豆腐のどこまでも白い孤独  
を考えてみる 『乱反射』

鮮やかな黄色日差しを照りかえしそれゆえ  
孤独 ゆらりひまわり

どんなにかさびしい白い指先で祖父は書き  
しか春の俳句を 『サリンジャーは死んでしまった』  
燃えるごみ燃えないごみと積まれてやは  
り燃えないごみが寂しい

一首目、自分の温かい喉を通る豆乳の存在を感じながら、崩れやすい個体を保つ豆腐の孤独を連想している。「どこまでも白い孤独」とは、ひたむきで弱々しく、いかにも寂しそうだ。真面目でやさしく、ユーモアのある人間の魅力の滲む一首である。

二首目、ひまわりといえは黄色。「鮮やかな黄色」には、精一杯美しく咲こうとしているひまわりのイメージがある。その上、「日差しを照りかえし」となると、眩しいほどの強い生の証明だろう。努力の最中は孤独なのだ。

三首目、そこにあるのは祖父が記した俳句。それは春の俳句で、何かが始まる春という季節と、祖父の老いの取り合わせが切なかったのだろうか。この歌の背景にあるのは、祖父の人生を想像し、祖父を思いやっているしみじみとしたひと

りの時間である。

四首目、燃えないごみは、ごみとして出された瞬間から、以前と変わらぬ姿のまま存在がごみになる。燃えるごみのように灰や煙になることもできないまま。そういうことはやはり悲しく寂しい。生活の一部や、この世界の片隅にも、彼女は心を添わせる。

小島なおは、時折ひとり、心を澄ませて自分の内面を見つめる。それは習慣となり、気質となつて、他者やあらゆる物事に向き合う時の、広く深い視野へと展開されているのだ。この二つの視野、つまり自分の心を凝視する視野と、他者や物事に大きく伸びやかな心で寄り添う視野は、比例して彼女の歌の世界を豊かにしているにちがいない。自己主張はあまり強くなく、自分自身は詠まれた歌の世界で控えめで比較的小さいのだが、彼女の視野を通して表現された広大な世界や、尊重する他者の辺<sup>ほとり</sup>で、無二の存在感を読者の内に残す。その例として次の七首を鑑賞してみる。

なんとなくかなしくなりて夕暮れの世界の  
隅に傘を忘れる 『乱反射』

海満ちるように歌声きこえつつ夏のちいさ  
な泡であるわれ 『サリンジャーは死んでしまった』

ひえびえと秋の手摺りの続きいる地上で時  
に泣いたりもする

出会ったときのきみとは違うきみである八  
百回にわたる夕焼け

まだ知らぬ場所限りなく存在し時折われを  
遠くより呼ぶ

鉄道の好きな友ゆえ私より広き世界に住ん  
でいるかも

少女期のわれを照らせる千の螢たつた一度  
のアメリカの夏

一首目、傘を忘れた時のなんとかなしい気持ちと夕暮れの風景、忘れたことに気づいた今の気持ち、それらを開く心の中の場所は、「夕暮れの世界」で現実の街角ではない。傘は作者の分身とも、心の欠片とも感じられる。

二首目、海満ちるようなイメージの歌声が、海満ちるような感動を伴って聞こえてくる。あふれすぎる感動を受けて小さくなつてしまっているわれ、である。

三首目、そこは、長い長い手摺りの現存する場所でもあり、手摺りが必要とする、たよりなく、寄る辺ない心配ただよう場所。そう解釈した。また、「ひえびえと秋の手摺りの続きいる地上」は、秋という季節の初めから終わりまでを表現した隠喩とも読みとれる。そこで時に泣いている作者。秋という季節を見尽くしている視野と感受性だ。

四首目、夕焼けが八百回全部違うから八百日分全部違うきみが分かるのだ。四、五首目の「八百回にわたる夕焼け」には、それゆえの切なさを感じるが、夕焼けから受ける感動と癒やしの趣もある。

五首目、宇宙の地球の日本の、そして家の近所の、と視野

の広い彼女にとっては、まだ知らない場所は本当に限りなくあるだろう。それらに向けてアンテナを張っているから呼ばれるのだ。「存在」「呼ぶ」という表現から、場所にも命や思いがあって、彼女と交信しているかのようにだ。この一首の中で彼女は静かにその不思議な体験を待ち望んでいる。

六首目、人の趣味の世界を考え、人の見た風景や感じてきたことを想像している。色々な人がいて、知らないことがたくさんあり、この世界はおもしろい、と素直に感じている作者が見える。これは人と心を通わせるために必要な、伸びやかな視野だ。

七首目、少女期のアメリカでの思い出が、小島なおの感受性や物の見方に影響していることを思わせる一首だ。日本とは違うアメリカの蛍とその風景。照らされていた自分。遠いアメリカでの生活は、千の蛍の光のように、強烈に鮮やかに蘇り、それはいまだに実感として彼女の中にある、という印象だ。時折遠いアメリカに心を飛ばし、そこに身を置くように思い出にふける、そうすることがきつと好きで、それは歌を詠むときの姿勢に通うものがあるだろう。

小島なおは、自分の内面の世界を大切にし、同じように他者や物や自然の見えない内部にも心を寄せる。遠く深く向けその視野は世界と融合しているような彼女の作品の核だ。最後にこの四首を味わってみたい。

飛翔する鳥のこころはあたらしき画用紙を  
買うわたしのこころ

『サリンジャーは死んでしまった』

雨にも眼ありて深海にジャングルに降りし  
記憶のその眼ずぶ濡れ

雲見ればわがうちに雲生まれたりその雲が  
いまきみに会いにゆく

きみの手を掴んで駆けるこのときをぎしぎし  
しと樫の木が立ちあがる

一首目は、「鳥のこころ」と「わたしのこころ」がこの作品の中で真実繋がっている様子で、比喩の気配があまり無い。二首目は、凄いものを見たという感覚が読者にも残る。雨の隣の隣に作者の肉眼の存在を感じてしまう。三首目は、しつとりとした余情のある歌。淡い白雲のイメージ。雲は、読後、読者の心の中にも余韻として流れる。四首目、この歌は『サリンジャーは死んでしまった』の最後の一首である。ぎしぎしという音が実際に聞こえてくるようだ。歌の力が樫の木を読者の心の中でリアルに立ち上らせる。彼女が歌に向かったひとりの時間は、この世界の命と繋がりが、多くの読者と手を繋いだ。

歌を詠むことは孤独だ。だが、他者と繋がることにおいて、歌を詠むために使う、場の気配を読み取る視野や、他者の気持ちや思いやる想像力は結局大切だ。豊かな視野や想像力を得て、自分や世界を深く知れたなら日常はもっと楽しい。

明日の歌のために、自分だけの空をひとり静かに思っ  
てみたい。